古今集における声点の認定について

秋永一枝

一　はじめに

アクセント史研究でそのよりどころとされるのは、第一にアクセントを示す記号がどのように注記されているかであり、第二にそれを正確によみとっているかである。方言アクセントの調査の場合でも、インフォーマントの言い違いや意義の誤解などから、こちらの意図する解答が得られない場合もある。だが、調査者の能力によってはすぐにその正否が確かめられもするし、他のインフォーマントによって更に確認することも可能である。ここでは、調査者の経験と訓練された耳が最大の強みとなる。ところが史的アクセントの場合は、その資料に注記された声点なりゴマ点なりの注記に隠されているあらゆる問題点を洞察しなければならない。勿論これも調査者のよく訓練された目と経験がものをいうといってよい。

だがその洞察力が資料によっては充分に発揮できない場合もある。最大の難点は、貴重書であったり、個人の所有であったりして、原本の被見が困難なことだろう。たとえ被見が許されても短時間であったり、暗かったりして、充分な調査がむずかしい場合もある。原本がみられずとも複製本があればまだしもであるが、それでも複製ということで声点の認定に誤りの加わる場合もある。

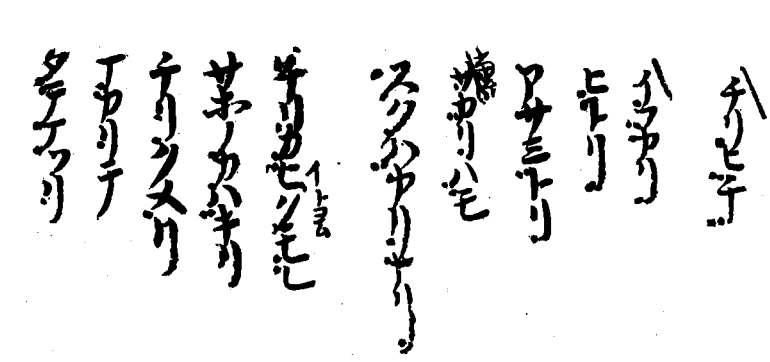
ここでは原本・複製本両様の調査における声点の認定について述べてみたい。その認定の良し悪しによって、次に飛翔することが可能かどうか、それらの問題点についても若干論じておきたいと思う。ここで単に「資料」という場合は声点注記の（古）写本をさし、複製本は「複製資料」として区別することにする。

二　声点か否か

資料によっては汚損がひどく、点々と染みのついたものや、虫損がはげしく時には書物の体裁をなさない場合さえある。

点々とついた染みは、紙質及び声点の色・形態に関係するが、時として朱点か染みか判断に苦しむ場合がある。楮紙は雁皮紙

2『訓』



3『高貞』

上声

平声

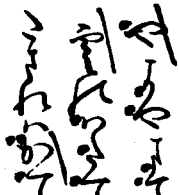
a

b

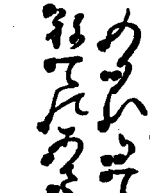
4『清声』②

4『清声』①「て」

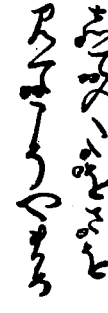
上声a



上声b



平声



5『尊恵』「ふ」

上声a

(12) (61) 754

(↓左記「ふかやふ」)

上声b

39 129人 1001 1071◦

平声

(14) 253 508 785 847◦ 1068

1『尊恵』① 消去痕(↓上「いふかり」右「ふたうた」)

(3) 25 81◦ 479◦

②

556◦ 874 1090 426

（斐紙）と違って水分の吸収がよく、朱も紙にしみこんで盛り上らず、染みと区別しにくいところがある。

たとえば「〔古今〕訓〔点抄〕」（以後〔　〕内省略）の料紙は楮紙と思われるが、朱点はもり上らず色も暗く、薄い箇所もあって、点々とある染みの色と見紛うほどである。声点と関係のない位置に染みのある場合はまだしも、声点としても誤りではない位置にある場合は、声点か否かの認定がむずかしい。「〔古今和歌集声点本の研究〕資料篇」にも記したが、十八985「ミルナヘニエトヨム」では、「ニ」の平声の位置にある点は薄く、文字と離れすぎるようで声点ではないと一応認定したが、そうした箇所は二、三に留まらない。十七927「フムツキノ」（太字は双点を示す。以下同じ）で「ノ」の平声点らしきものは、冊子本であった（現在巻子本）際に朱が移った結果と認定したが、もっと科学的方法を利用できれば確証が得られることであろう。

複製資料では朱点と汚れとの見極めはことにむずかしい。「伏見宮家本古今集」『伏片』十427△「カニハサクラ」の「ク」の平声の位置にある点は、原本の紙の汚れが写ったものである。『伏片』や『訓』のように、染みがそのまま印刷されていればまだよい。複製の際に朱がすべて消えてしまったり、声点を染みと誤って修正消去してしまうことがあるのは、最も恐ろしいことだ。

冊子本の場合、対する面の朱点の色が一方に移ってしまうことは時に見られる。多くは移った朱の方が色が薄く、位置からも確認できることが殆どである。例えば「高〔松宮家〕貞〔応本古今集〕」十三617の「女のもとに」（左面）では、「も」の上声の位置に朱点がみえるが、これは十二615（右面）の声点が移ったものである。

また、「梅〔沢家本古今集〕」一38の「きみならて誰にかみせん」（右面-2ℓ）の「せ」の右には薄い朱が残るが、これは次の歌39「梅花にほふ春へはくらふ山」（左面2ℓ）の「ら」の朱点が移ったものである。『梅』は一冊本だが、巻十の末に朱書で「度々校合加朱点了」の識語があり、巻十までの、あるいは全巻の墨書が終った後に朱を加えたと思われる。この歌のように一語にしか差声がない場合は、朱の乾かぬうちに紙をめくることもあったろう。問題はこの朱を声点と誤認して書写する場合があることだ。

「広大本〔古今集〕」は『梅』とほぼ同じ文節に声点を注記する。多少異なるのは、仮名に差された声点を、位置を無視して漢字に移点したり、単点を双点にしたりするなどである。奥書に「此集校合之時予具聴之早　夢老　花押」（夢老＝肖柏）とあり、この折に『梅』（或いはその写し）の声点を移点したことが想像される。『広大本』の38「君ならて誰にか見せむ」の「せ」の右側には明らかに声点として注記された朱点がみられ、前述の『梅』のしみを声点と誤認したことが分る。

また、紙背文書の移りが墨声点とまぎらわしいことも多い。「〔古今〕問答」も紙背文字の墨色が濃く、声点は墨のため原本でも不分明な場合があった。例えば六319「＼たきつせ」の「た」（1）「き」の部分は、「た」の上声の位置に圏点の上部がかすかに見られるのみであり、明瞭に確認される「き」の一点は第一画左端よ

り離れすぎていることから、双点か？と認定しただけで、二点が見られたわけではない。

虫損が声点と見紛う例は複製資料には有勝ちのことだが、次の例などは私にとっても思いがけないことであった。『伏片』三153「五月雨ニ物思ヲレハ」（左面1ℓ。複製本77ベ）の「ヲ」の上声の位置には、複製本ではっきりと声点がみられる。ところが原本ではその部分虫損（修復）のあとがあり、その周囲に墨痕が残っている。この資料の声点は序の朱注と真名序以外は朱点であるから、声点の痕跡とはいえない。その墨痕は裏面「ケ」の去声の位置にもみられるが、「ヲ」と対する右面「ス」の虫損の位置と合致しない。長年書陵部で修復を担当された遠藤諦之輔氏に伺うと、真っ直ぐに、つまり紙面に垂直に丸い穴をあけるのは先のとがった鉄砲虫で、朱を好むそうである。他の虫はふつう墨はよけて食うが鉄砲虫はまっすぐ進む、と。それで疑問が氷解した。右面（1ℓ）「ス」の虫損と位置が合わないのは江戸時代[2]か今回かの修復の際の折りずれであり、「ヲ」の上声朱点も食甚したが前の部分の墨の虫糞がちょうど「ヲ」の虫損部分に残ってしまった。雁皮紙は固く、墨も朱も中に染みこまぬために、墨声点のような形で虫糞が残ってしまったものである。この資料の声点が墨色であったら、虫糞を声点と誤認するところであった。

ごく稀に複製本の方がよい場合がある。『伏片』二十1070「マナクトキナク」の「マ」、及び二十1072「イモトアレト」の「レ」には、それぞれ複製本[3]（353ベ）に声点がみられるが原本には朱点がなく、その部分に虫損修復のあとがある。この類は他にもあり、真名序「寸苗（去去）」（364ベ）の「ソ」も原本には脱落している。当時書陵部で事に当られた伊地知鐵男氏によると、虫損修復の前に複製用の写真をとったそうであるから、この場合は複製本の声点を優先しても許されるであろう。

資料によっては注記した声点の訂正消去に、削消と塗沫の二つの方法がとられる。一般には前者で、刃先で紙面をけずるために削消のあとが毛羽立っている。その上に声点を注記すると、他の声点と異なってきちんとした丸みがなく、かすれた形態となってしまう。例えば定家自筆と思われる「伊〔達家本古今集〕」には、文字・声点ともに削消が目立つ。料紙は雁皮紙で殆どの朱点は明瞭であるが、位置の訂正は多く、一八九声点中二十声点？ に及ぶ（双点も1として数える）。削消のそれぞれは『資料篇』で報告したが、その殆どが数ミリの位置の訂正で、声点をより望ましい位置に変更している。「明月記」にさえ時に声点を差す定家である。貞応二年本・嘉禄本・伊達家本と続く声点注記は、恐らく彼自身の手によって行なわれたろう。久曾神昇氏は「明月記嘉禄三年閏三月十二日」の記事、「黄門所レ誂之古今、今日終。老眼書写、進二土御門殿一。」によって、『伊』の書写はその時とされる（『伊』解題その他）。とすれば定家は六十五、六歳、「老眼書写」による数ミリの声点位置の誤記はむしろ当然のことではなかろうか。

「堯恵本古今集声句相伝聞書」『尊恵』の声点は墨圏点であるが、ここでも声点の削消がめだつ（写真1の①）。例えば、序(12)

「いふかり」の「か」の平声点、(14)「ふたうた」の「ふ」の上声点はそれぞれ削消した痕がある。[4] 後者は訂正した結果、「堯恵本古今集聞書、一名延五記」『天恵』と同じ声点になったが、一方、「長流本古今集聞書清濁声句訓説等」『天長』の「ふたうた」とは異なった声となった。既に記したことだが、[5]『尊恵』は相伝の書の〈上上平平〉を注記したあとで、当時のアクセントにかなう声点〈平上平平〉に訂正すべく「ふ」の上声点を削消したものと考えられる。削消が単なる誤記の訂正とのみ簡単に片付けられないのは、こうしたアクセントの変遷や伝授の歴史と関係するものがあるからである。

声点消去には、このほか塗沫することが稀にみられる。例えば「顕昭古今集序注」『顕府』序(19)の「マユコモリ」[6]の「コ」の第一画始筆が長すぎるのは、上声の位置に差した朱の双点を抹消するためと思われる。この複合のグループで○○○●○型は最も安定した型で『伏片・梅・訓』等も同じ声点を注記するが、「毘〔沙門堂本古今集註〕」のみは○○●●○型を注記する。この型も少数形として有り得るので、[7]『顕府』の移点者が誤って「コ」の上声点を書き入れた後に訂正したものと思う。

もう一つ、声点と見誤り易いものに句点がある。「永〔治二年本古今集〕」には朱で句点を注記した部分があり、その点は朱声点よりも心持ち大きい。カラーの複製資料[8]によったが、概ね句点と声点の区別が可能である。但し二十1097「よこほりふせる・」の「る」の下の朱点は句点ととったが、[9]平声点とまぎらわしい。また、十九1058「人こふる・ことを・ゝもにと・」の「る、を、と」の下の点は句点ととったが、同じく清輔本と関係の深い『伏片』の「ヒトコフルコトヲオモニト」の「ヲ」の平声点は句点の、「オ」の平声点は踊り字による誤写と考えられないでもない。『伏片』十431「アワヲカタマノ」の「タ」の上声が、もし『永』「あわをか・たまの」と同類本の句点の誤写とすれば、『伏片』の声点注記の時期を下げなくてもよいことになる。[10]『永』の朱墨の声点は『伏片』のほか「寂〔恵本古今集加註〕」とも深い関係があり、詳しくは別稿とする。

このほか、『尊恵』十426「あなう。めに」(声点は墨圏点。写真1の②)の句点は、『天長』「あなうめに」(「う」の平声は朱圏点、それ以外は朱点)と当然関係があるだろう。

声点が概ね正確に注記されている善本に、稀におかしな声点が存在した場合は、句点の存在を一応疑ってみることが必要である。

三　声点の位置

声点の位置の認定には、自ら調査者の解釈が含まれることは否めない。同じ資料を見ても人によって異なった認定が生じるのも止むを得ないことであろう。例えば『訓』序(11)「チリヒチ」の声点を、秋永は〈○○上〉と認定し、諸本にみられる●●●●型と●●●○型の両様として論じたが、[11]遠藤邦基氏は〈○平平平〉

と認定された。[12] たしかに『訓』の注記方法としては、「チ」に両様の声点を注記したい時は「チリヒチ他流チ」とか、「チリヒチ他流チ」とか書いてほしいところである。また、どちらの声も認める場合には序[18]「イタツキノ平平平上ッ両様無難」とでもしてほしい。だからといって、これをチリビヂと認めがたいのは、ハ行転呼して「ちりゐち」と書かれるものが既に「元永本古今集」（元永三年一一二〇書写）等にもみられ、その後の声点本にもチリイヂ・チリンヂ・チリインヂの注記がある。また源承の「和歌口伝」[13]の中にも「ちりひぢ」と「ちりゐぢ」の両説があり、教長点本に「ひち」とある旨記されている。その他、どの声点本にも「ひ」が濁る記載は見当らない。また「塵」と「泥」という並立語の意識であれば、それぞれの声点を生かして●●○○型となろう。ハ行転呼して並列意識が薄くなってくれば、一般複合名詞の法則により●●●●型が多く、ついで●●●○型になりやすい。前部成素が●●型の場合は●○○○型にはなりにくく、遠藤邦基氏の認定される〈○平平平〉はまずあり得ないことである。尤も氏は、十四742「アヲツツラ」と共に、このような連濁の「形態は、おそらく臨時的な音声言語が「読み癖」の世界に採用――だからこそこの語句に声点が付されている――されたものであろう。」とされ、「本来ならば表記に反映しがたい「口のすべり」とも思われる」例と書かれる。「青葛」の連濁形は他に例もないが、『訓』の薄い朱点によって、意識的に双点を注記したのだと確信することは私自身にはむずかしく、誤点ではなかろうかと考える。但し、「チリビヂ」と認定しがたい理由はもう一つ、その差声位置にある（写真2参照）。他本からの移点の場合は、双方の文字の字形・字体の相違などから屢々正確な位置に差されない場合がある。しかし、『訓』とか『寂』（移点された部分は別として）は、著者即ち本文書写の人が加点者と思しく（但し『訓』が著者自筆本であるか否かは、残念ながら断定できない。）、その場合の差声位置は明確であるのが常である。そこで『訓』の「リ」「ヒ」に注記された声点全例を調べたところ、「リ」の平声は第一画のほゞ下か右下にあって、「塵泥」の場合は「リ」の平声とは認めにくい。また「ヒ」の平声が次の文字の左上にまでかかる例は一例もないことから、「ヒ」の平声双点とは認めにくく、「チリビヂ」連濁形は認定の誤りとしてよかろうと思う。

一般に声点位置の認定がむずかしい文字としては、「ゝ・、へ・へ、ゐ、く、と」などがある。踊り字や「ゐ」は概ね文字が小さく書かれるため、平声か上声か見分けがつきにくいことが多い。その他にも次のような問題がある。

写真3に示すように、『高貞』の「て」の上声・平声は、それぞれ起筆の上と、止筆の左で明らかだが、「夢てふ」のように起筆のすぐ下に、或いは下接して朱点が差されていることがある。これはスペースの関係で「て」文字が平たい場合に起ることで、この資料の場合は平声と認定して差支えないと思う。

但しこれらはあくまでも資料それぞれによって異なる問題である。例えば「古今私秘聞付頓阿真筆古今集声句点」『清声』の「て」の場合は写真4の①のように上声・平声明らかな点のほかに

起筆の左下にほゞ接する点がある。写真は「て」の全例であるが、「上声b」とした三例のうち、67「花みかてら」と1045「のかひかてらに」の「て」の上声は前の拍の平声点と接触しないために位置を少しずらしたことが考えられる。このようなことは、同じ資料の「たまたすきなる」（平平平上平）の「す」、「つらつゑ」（平平平上）の「ゑ」の声点などにみられることである（4の②参照）。1072「ねての」の場合は他の資料から「て」を平声と認定したいところである。だが、巻十九・二十は「古今私秘聞」『清聞』の声点と酷似することもあって、『清聞』と同じく上声と認定したものである。[14]

『尊恵』の「ふ」の声点にも問題がある。写真5の①の「上声a」はまず問題ないが、「上声b」と「平声」の声点はまぎらわしい。それでも、「平声」のグループでは「ふたうた」以外の「ふ」の声点は、辛うじて第三画の起筆のあたりに下接していて、平声と認定し得る。「ふたうた」を〈平上平平〉と認定したのは、「ふ」の上声点を削消した痕跡が残ることと、削消の項で記した理由による。「上声b」の声点は、第三画の起筆に上接して「a」とは大分位置の開きがある。この「くらふ山」のように、清濁のみを記す時の声点をアクセント資料とするのは危険なことが多く、[15]別に論じたい。「ふかやふ」（上上平上）は『毘』の〈平平上上〉のような低起式からの変化の途上にあるのだろうか。アクセント変化以後の資料は、伝授に用いた声点本のアクセントと変化後の当時のアクセントとの両様が反映していて、そのふりわけがむずかしい。

四　誤写と脱落

たとえ声点の位置が分明であっても、それをそのままその位置の声点と認定できない場合がある。

『伊・高嘉・梅』一2の「袖ひちて」[16]は、「ひ・ち」の文字が接近しているために〈平上〉の声点が「ち」の〈上〉として移される可能性がある。また、『伊・高嘉』などの一6「（花とや）見らむ」〈○平上〉の声点も接近しており、『梅』では「む」〈上〉のように移点されている。これらはアクセントの理解度が薄くなれば当然誤写の元となること疑いない。

また、『毘・高貞』両本はほぼ共通の声点を有するが、ともに上声を差すべきところに去声を差すことが多くみられる。勿論字音語の場合は仮名表記であっても1001「エフ（ノミ）」（去上）のように定家本系統と同じ声点が差されており、これは去声ととってよい。だが二82「コトナラハ」の〈去平上平平〉の去声はどう考えるべきか。私はかつてこの類を上声の誤写と書いたが、四声の位置を示す一般的約束の上からは誤点となろうが、注記者ならびに移点者からすれば、これらは了解事項・許容事項とすべきかもしれない。つまり、「コ」の上声で清濁両形を示すための手段だったととることができる。

右のように両様の声点がある時の去声の説明は易しいが、巻末になると、字音語でもなければ複数の声点も差されていない時に両本ともに去声注記が目立つのは誤写としか言いようがない。例えば両本とも十九1028「ナラヌ思ヒニモエハモエ」（平平去上平平去平）のように、去声

点が二か所差されるが、『永』は〈平平上（以上墨点）〉〇〇〇上上平平上平（以上朱点）〉を注記するし、『伏片・寂』ともに「もえ」注記である。また、1029「アヒミマクホシハ」の去声も、『寂』その他から推定すれば〈平上平上上〉とありそうなものである。この「マ」の去声に奥村三雄氏[17]は左のように意味を認めようとされる。

古今集声点本の例（1029高貞・毘）における「マ」の去声点表記なども、《前接拍の〇音に従属しようとする側面、及び●音としての個性を主張しようとする側面》の両者が妥協した姿と見なされる。

氏のようにこの去声点の意義を認めるならば、「ナラヌ」「モエ」「アヒ……」の去声の類も解釈しなければならないだろう。これはやはり、移点の際のどこかの段階での誤写と考えねばならない。巻末になってそれが目立つのは、どうしても文字なり声点なりが早忽に乱雑になる可能性が巻末には出てくるからである。

その他、連綿体で上の字から続く場合、文字によっては去声ととられる位置に上声注記があることもあり、これも誤写の一因となるだろう。

一般に、文字と声点が同一の古写本から書写される場合は誤りが少ない。だが、片仮名と平仮名、相違する字体・字形、仮名と漢字といった異なった表記形態に移点する際は、どうしても誤写や止むを得ぬ脱落が起りやすい。アクセントに関しての知識がある場合は、それぞれの形態に誤りなく移点することが可能だが、その反対はむずかしく、清濁表示のためのみということにもなりかねない。

例えば『寂』は傍注及び数少ない伝授された声点を除き、書写者自身が声点を差したと考えられるいわば第一次資料であるが、次のような例がある。

『寂』十五784「あま雲の」は「クモ」に〈平平〉
十五791「野火の」は「ノヒ」に〈平上〉

これは片仮名本に注記された声点を移点したものだが、このように克明に注記される例は珍しい方といえる。『毘・高貞』などは充分なアクセント知識を持ちあわせない人の書写と思しく、次のように屢々誤点や脱落がみられる。

十九1002「しのふくさ」は『寂・訓』とも〈平上上上平〉を差し、『高貞』は〈平上去上平〉を差すが、『毘』は「シノフ草」と漢字を交えるために〈平上去平上〉と「草」に仮名二字分の声点を移してしまう。この『高貞・毘』は、ともに同じ声点（同じ声点本からという確証はない）を別々に移点したわけで、『高貞』が『毘』から移点したのではないことがここで明白である。その逆も不可能であるのは、『高貞』は一冊本でありながら巻十一以下のみに声点が注記されているからである。

なお、「草」に双点・単点を記すことは、アクセントの上からは無意味であるが、シノブグサと連濁することを示すためには有意味であった。更に『毘』には十446△「シノフクサ」のように、連濁を示すための声点注記も行なわれている。

前述の『尊恵・天恵・清聞』など、時代の下ったものなどは、

清濁を示す目的での声点注記が多く、その場合の声点の位置はアクセントとしては不正確なものが多い。これは、注記者の目的意識が変化したのであるから、誤点の扱いをすべきでなく、清点・濁点として処理すべきものであろう。

但し、二拍一字の漢字（和語）に注記された声点でも、諸本により扱いを異にしてよいと考える。それは、資料それぞれの声点の精度から推定するもので、次の例では a の三例の声点は認めてよさそうである。

a 八388『顕大』「カヒナヒノ杜マテ」に〈平平平去○上○○〉[18]
五265『永』「さほ山に」に〈平平平○〉
十451『毘』「ノヘノ虫」に〈平上平上〉

b 五283『毘』「竜田河」に〈○○上〉

c 七343『毘』「サヽレ石ノ」に〈上上上上平〉で振り仮名「イシ」に〈上平〉
五263『毘』「カサトリ山ノ」に〈○○平平上○〉で、振り仮名「ヤマ」に〈上平〉
三141『梅』「（やとは）から南」に〈上上平〉

字音語の場合、漢字一字が仮名二字にあたるものは、次のような規則的注記方法をとる。[19]（上が漢字、下が仮名の場合）
平……平平、上……上上、去……平上、入……平平

和語の場合も、一類●●型の二拍語は上声の位置に、三類平平型の二拍語は平声の位置に声点を注記したことが想像される。次の例は更に三拍の場合を含むと考える。

a 二十1069前『永』「大歌所（フホウタ）」は漢字に〈平平上〉

即ち、a のグループ「杜・虫（ち）」は●●型の、「山」は○○型の、「大歌所」は『顕天片・京秘』と同じく○○○○●●型の、いわば略表記[20]と見る。

だが、c 343の場合「石」の上声を認めると高平型になり、振り仮名の声点が示す●●●●○型と一致しない。それだからこそ両様を示したのだ、という反論も出よう。確かに「ささ（ざ）れ石」は「前田家本和名抄」で高平型、「図書寮本名義抄」『顕府・訓』[21]で●●●●○型で、複合法則からみても両様現れて差支えない。だが、「ノ」は高平型には高く平らに接続し、……○型には低く接続するから、「ノ」の平声は振仮名の声点に続くものと思われ、結局この「石」の上声は認めにくいという扱いをとった。263では、「山」の上声を認めると○○○○●●型となり、振仮名の○○○○●○型の安定型と一致しない。その上、「山」は三類○○型であるから、複合して低平型か……●○型にはなっても○○○○●●型にはなりにくいところから、誤点という扱いをとった。[22]『梅』の「南」の平声は、『訓』の〈上上平〉と同じ声点を示すと考えることも可能であるが、この資料の差声状態から押して誤点と考えた。b 283の「河」の上双点を、『伏片』〈平上上上〉、『寂』〈○○○上上〉と同じく〈上上〉を示すととるか、単に濁を示すととるかは問題である。他例から考えると、「河」に上双点とその下に単点を付す方法が最も一般的である。例えば四198『梅』「色つきぬれは」〈○上平○○○〉の部分を、『広大本』が「色付ぬれは」〈○上平○○○〉とする形がふつうであるところから、〈上上〉の略表記と認めにくいところである。尚『毘』は、

いろいろな性格の声点が何本（なに）という記載なしに、形態も色も同じに書写されている点、等質の声点資料として扱いにくいうらみがある。

或いはまた、仮名注記の声点が、移点される写本のその部分が漢字表記のために脱落する例もみられる。次の『毘』と『高貞』の声点を比べてみれば明らかであろう。

十一500『毘』「蚊遣火（カヤリヒ）ノ」の振仮名に〈上上上上〉
　『高貞』「かやり火の」に〈上上上〇〇〉
十九1001『毘』「アマクモノ」に〈平平平平〇〉
　『高貞』「あま雲の」に〈平平〇〇〉
十四723『毘』「ハツハナソメノ」に〈上上平平平上〇〉
　『高貞』「はつ花そめの」に〈上上〇平上〇〉
十五818『毘』「アリソ海ノ」に〈平平上〇〇〉
　『高貞』「有そうみの」に〈〇上〇〇〇〉
十七883『毘』「ヤマモトハ」に〈平平平平〇〉
　『高貞』「山もとは」に〈〇平平〇〉

但し一般的には、漢字が一拍の場合は声点が漢字に移点されることが多く、二拍以上では省略されることが多いといえる。例えば次のように。

十二567『毘』「身ヲツクシトソ」に〈上上上上平平上〉
　『高貞』「みをつくしとそ」に右と同声点。
十六842『毘・高貞』「山田」〈〇平〉

但しここで、移点の際の脱落か否か注意すべきことは、声点注記の了解事項として次のような傾向が見られるからである。(23)

後部成素が原アクセントと同じ型ならば後部のみ略し、前部成素が原アクセントと同じ式ならば前部のみ略する、……それ故、以上と異なる場合、一般に後部成素の型が変わる場合は略表記しないことが多い……

即ち、二類（●〇型）の「歌・川・下（した）・冬……」が後部成素で「……歌・……川」が……●〇型であるものは、「歌・川」部分の声点を省略することがある。また、前部成素で「下……・冬……」が規則的に高起式となるものは、「下・冬」部分の声点を省略することがある。そうした現象との見極めが重要だということである。

また、二本以上の声点本から移点する場合も、先程の『毘』「コトナラハ」のように誤りが生じやすい。例えば『毘』一7「ヲリケレハ」には〈平平上上平平平〉の声点が差されている。この場合、「ヲリ」の部分は〈上上〉〈平平〉〈上平〉〈平上〉の四通りの組合せが可能である。が、二条家系統が〈平上〉で「居り」ととり、六条家系統が〈上平〉で「折り」ととり、『毘』にも両様の注釈のあるところから〈平上〉と〈上平〉の両様と認定した。(24)これは『毘』のよった声点本が色か形の異なる声点を差していたのを、墨圏点で移点してしまった可能性もあるかもしれない。或いは、一方は本文に、一方は注の形であったものを一括して移してしまった、という可能性も考えられる。

更に、全くの単純ミスも時にみられる。

十四680は『毘』が「君トイヘハ（平）」とあるのに、『高貞』は「きみといへハ（平）」のように「い」に双点が注記される。これは「い」

と「ハ」の文字の近似から、うっかり誤って移点したものであろう。

十九1036「かくれぬのしたよりおふる根葶(ねなは)の寝ぬ名はたてじ……」では、『梅』が第三句「ねぬなはの」に、第四句「ねぬなは（たてし）」の声点〈上上上平?〇〉を注記している。[25]

声点の意義を理解せずに、その伝授を珍重したものに「陽（明本古今集）」の声点がある。これは為相自筆本ということであるが、朱声点は別紙に移して貼布する。[26] そのため、一6「はなとやみらむ」では、「らむ」とあるべきものを「らむ」（上平上入上）のように、序「したてるひめ」とあるべきものを「したてるひめ」（上平入上上）のように貼布してしまう。後者は明らかに左側に張り込み場所がなかったことによる誤りで、声点に関する理解の乏しさが原因である。[27]

五　色と形

声点の形は星点と圏点が殆どで、ごく稀に短かい線点のもの、丶の如きものが注記されている。圏点は概ね二筆書で、円形か逆三角形かであるが、小さくて二筆か否か判別のつかぬものもある。資料によっては、片仮名に星点、漢字に圏点のように、両形が注記される。一般に、声点注記数の少ない資料ほど、また、定家本のように相伝に絶対的権威のあるものほど、丁寧に差されている。声点注記数が多いものは、巻末にゆくに従って乱雑に差される資料もあるのは、当然のことであろう。

声点の色は朱または墨で、ごく稀に朱墨の他に青色の声点が注記されるものもある。

朱点は紙質によって、また濃度によって異なった形態をみせるが、一般的にいえば斐紙は盛り上がることが多く、楮紙は紙にしみこむ傾向がある。古い資料ほど明るく美しい朱が多く、時代が下がるほど暗色の朱が多い。但しこれは絶対的なものでなく、注釈書でない本文のみの場合は、ごく良質の料紙を使用するものもあり、その際は高価な朱墨(すみ)を用いたようで、朱の良し悪しが関係するようだ。

明るい朱単点の外側に暗い朱単点が差してある場合、暗い朱は後入れであることを疑い、清音から濁音への変遷を考慮する必要がある。なおこれは、朱単点の外側に墨単点が差してある場合も同様である。

資料によって、朱点・墨点・朱圏点・墨圏点のうちの、一種類から四種類までが使われているが、その他、朱と墨の重ね差しもみられる。例えば『伏片』のように、朱点が主だが、序の朱注には墨点、若しくは朱点の上に墨の重ね差し、真名序には墨圏点という形式もある。また『清声』のように墨圏点のなかに朱点が入るという方法もある。主な声点本については『資料篇』で報告したのでここでは触れないが、同一資料に形や色の異なる点がある場合は、アクセントの推定がなかなかむずかしく、『寂』では次のような例がみられる。

一人6『寂』「素性法師(ホウ)ホッシトハヨマス」は「素性」に〈上平〉の朱点、「法師」に〈平上〉の墨圏点。

『毘』「素性法師」に〈上平平上〉の墨点。

序(17)『寂』「（なにはつにさくや）このはな」に〈平平上平〉

の朱点、「この」に〈上上〉の墨圏点[28]と墨鈎。「此花トヨムヘシ」の傍注。

『毘・梅』は〈平平平平〉、『訓』は〈上上○○〉だが第五句の「コノハナ」には〈平平○○〉と声が異なる。

八373人『寂』「いかこ（のあつゆき）」は朱点で〈上上上〉だが、「こ」の朱点の左に二筆書墨圏点らしきものが並ぶ。

『毘・訓』は〈上上上〉だが、『清聞』など清濁両説を記す。[29]

さて、これらは諸本の系統と解釈との関係でとらえるべきものだが、まずその声点をどう読むかということが先決である。『寂』「素性法師」は、朱点が先、墨圏点が後で他本からの移点と考えるが、その他本に〈上平平上〉とあったか、「法師」のみの加点であったかは不明である。『毘』の声点も、朱墨の使いわけなどなくて、二種類の声点の移点か否か疑問。但し、この語に関しては、複合の度合がゆるいと考えられるので、アクセントの上からはいずれでも問題とならない。

「この花」は〈平平……〉が「木の花」、〈上上……〉が「此の花」を示すものであり、『寂』の墨点と注は、同じ声点本からの写しの可能性がある。『訓』は、第二句を「此の花」とし、第五句を「木の花」としたもので芸がこまかい。

『寂』「いかこ」は恐らく朱単点で清音を示し、墨単点は清音ととるよりも朱単点に加えて濁音を示したととるべきだろう。後世の清濁両説も、そうした伝授の存在を裏付けることと思う。

一般にカラー以外の複製資料の場合、朱の写りはすこぶる悪く、薄色の朱の場合は殊に悪い。個人で写真撮影の場合は、Fフィルムを用い、グリンのフィルターをかけて接写したりするが、貴重書の場合、現在殆どそのようなことは望むべくもない。また、苦心して朱書が写せても、印刷の際網版にすると薄い朱点が逃げてしまう。そのため教材用などの安価な印刷では、朱点・朱注などすべてが脱落するということになる。図書館の撮影はふつうマイクロフィルムを使用するが、これでは朱が写らず、まして朱墨の区別は殆ど失なわれてしまう。

勿論印刷の紙質によっても異なるが、まして同一資料に朱墨の異なる点が存在したり、重ね差し[30]があったりすると、よほど印刷がよくなければ判別は不可能である。

カラーであるからといって安心はできない。例えば「高〔松宮家〕嘉〔禄本古今集〕[31]」では、朱の版が上下または左右に少しくずれているものがある。声点の認定に問題のあるものを上げると、次の例がある。

一2「袖ひちて」（28ぺ）、6「見らむ」・7「おりけれは」（29ぺ）・58「誰しかも」（41ぺ）、十436「うひにそ」（135ぺ）、十五760「ふかめて」（196ぺ）・805「いとなかる寛」（204ぺ）、十九1001「えふの身」（259ぺ）

つまり、墨の版と朱の版がずれてしまったのである。現代の印刷技術では、写真一枚で一ページの時はこのようなことはないそうだが、一ページに写真数枚を入れてカラー印刷となると、ずれの出てくるのは止むを得ないことらしい。

カラー印刷でもう一つ心配なのは、製版の際に墨を消して朱を残す手作業の方法である。誤まって消去したり残したりという懸念が残るので、原本との照合がやはり必要となる。

六

以上、声点の認定について問題のあるところを述べた。現在は多くの鮮明な複製資料が出版されるようになったが、かつては数えるほどしかなく、それすらも手に入りにくかった。写真撮影の許可が頂けたものは別として、多くは借覧しては声点を手書きしていったのだが、時間に制約のある場合は字形まで転記することはむずかしかった。アクセント史研究の上からはそれで間にあう時代ではあったが、諸本の系統や、誤写・誤脱などを考察する上では、できるだけ原本の字形も含めてノートすることが望ましい。

諸本の声点相互の関連を常に考えながら、それぞれの声点が注記された世界を想定し、その上でそれぞれの時代のアクセントを考察する必要がある。古今集に声点が注記されはじめた顕昭本や「古今問答」のような、いわば草創期のものは別として、定家よりあとのものは、伝授された声点と当時のアクセントによって差された声点の別を見わけることが、今後の重要な課題と考えている。

注(1) 天理図書館善本叢書「和歌物語 古註統集」47ページ-1ℓ。

(2) 巻十九のあたり、間合紙で修復のしるしがある。因に虫糞は爪の先でこすればぽろっととれるそうである。

(3) 宮内庁書陵部複製。昭和36年印刷。

(4) 『資料篇』17ページ・20ページに写真がある。

(5) 『研究篇上』480ページ。

(6) 『資料篇』28ページに写真がある。

(7) 『研究篇』238ページ参照。

(8) 「復刻日本古典文学館本」による。

(9) 『研究篇』22ページに写真あるが見にくい。

(10) 『研究篇上』50ページ。

(11) 『研究篇上』397ページ。

(12) 遠藤邦基①「「古今訓点抄」の声点——その機能について——」(叙説S57・10)、②「「古今訓点抄」の濁音——「読み癖」の解釈を通して——」(奈良女子大研究年報25、S57・3)

なお、②の中で遠藤氏は諸本の「加点者」をあげておられる。だが、奥書にある名をそのまま声点の加点者とすることには同意しかねる。その古写本を書写の人もしくは注の著者と声点を差した人(即ち加点者)とが常に同一人物であるとは言えない。例えば「高松宮家本古今集」『高貞』と「毘沙門堂本古今集註」『毘』の声点はほゞ同一だが、加点者を「(清輔)定家」とすることはできないなど。

(13) 「和歌口伝 十 訓説おもひ〳〵なる事」(日本歌学大系第四巻 47ページ)。この点については西下経一「古今集の伝本の研究」206ページに考察がある。なお、京都大学図書館「教長〔古今和歌集〕註」片仮名本にはそうした注記はなかったと思う。

(14) 「古今私秘聞」(ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会)の解題37ページに記した。

(15) 『資料篇』358ページなど。なお、この「くらふ山」の声は、39。から39に訂正する。

(16) 『資料篇』ロ絵写真B参照。
(17) 奥村三雄「平曲譜本の研究」494ページ。
ついでながら、奥村氏は1029「あひみまくほしは」の〈上上〉注記を「欲し」と解して説明される。だがこれは、「星は数なくありながら」の「星」にかかる懸詞であり、「星」の声点注記と考えるべきであろう。
(18) 『資料篇』324ページに写真がある。なお、『研究篇上』205ページの〈去〉は〈去〉の誤植であり、訂正する。
(19) 『研究篇上』529ページ～参照。
(20) 『研究篇上』36・171・265ページ参照。
(21) 『研究篇上』218ページ～参照。
(22) 『研究篇上』251ページ～参照。
(23) 『研究篇上』170ページ。
(24) 『資料篇』82ページなど。
(25) 『資料篇』の正誤表3に追加してある。
(26) 『資料篇』ロ絵写真参照。或いは「陽明叢書　古今和歌集」参照。
(27) 『資料篇』5ページ、「陽明叢書　古今和歌集」6ページ参照。
(28) 『資料篇』23ページに写真がある。この類、序(12)「おほささき」(『研究篇上』342 345ページ)、十八973「(なにはの)みつの」なども参照されたい。
(29) 『資料篇』312ページ。
(30) 重ね差しは「(御巫本日本書紀)私記」などにもみられる。『私記』は多く墨点の上に朱点を重ねるが、墨朱の位置がずれているものが多く、そのため複製資料では単点を双点と見誤る危険性が高い。
(31) 「定家本三代集」の内。昭和十六年の複製。

新刊紹介

秋永一枝編
『言語國訛　竹柏園旧蔵本影印ならびに声譜索引』
（「アクセント史資料索引」第一号）

『言語國訛』は、平曲の譜や四声を用いて語の発音を示したもので、本書はその影印・声譜付語彙索引（五十音順・分類別）および解題とから成る。底本は佐佐木信綱博士旧蔵の孤本で、天保八年（一八三七）「松そのゝあるし」の書写である。原本の成立は、序文の奥書に「戊寅ノ孟ノ夏」とあるところから、元禄十一年（一六九八）かとも考えられるが、『蜆縮涼鼓集』『音曲玉淵集』との比較などから、編者は宝暦八年（一七五八）と推定しておられる（解題77頁）。

その内容は、序文（一オ～二ウ）のあと、旧国名をはじめとして延べ三七七の文節に声譜が施され、さらに平曲の曲節が七段にわけて論じられている。

『言語國訛』は、平家物語・平曲の研究には勿論のこと、国語史・音楽史の方面にも資するところが大きいものと思われる。

私家版であるため、購入希望者は左記宛葉書で申込まれたい。

〒160 東京都新宿区戸山町一―二四―一
早稲田大学文学部秋永研究室内
アクセント史資料研究会

〔昭58・12　私家版　A5判　七九頁（うち影印二四頁）、二〇〇〇円（送料とも）〕

〔上野和昭〕